インフォメーション

お問い合わせ：仙台市市民活動サポートセンター
TEL 022-212-3010／FAX 022-268-4042　Mail sendai@sapo-sen.jp

サポセンスタッフから

サポセンとは

仙台の街中にある、一見ふつうのオフィスビル。サポセンは、「自分たちの住むまちを、もっと良くしたい」そんな市民の自発的な活動を応援する施設です。現在活動している人だけでなく、これから活動を始めたいと思っている人、ちょっと興味はあるんだけど…という人もぜひご活用ください。困ったことや分からないことがあったら、遠慮なくサポセンスタッフにお尋ねくださいね。

一歩、中に入れば…情報の宝庫。新たな発見が待っています！

サポセン1階の情報サロンでは、市民活動団体のみなさんから受け付けたイベントチラシやニュースレターなど、様々な情報を見ることができ、お持ち帰りもできます。仙台のまちにどんな人、どんな団体がいて、どんなことをやっているのか。情報収集ができますよ。

一歩、踏み出す…まずは、“参加者”になってみてください！

サポセンでは、いろいろなイベントや講座も開催しています。肩書きも世代も越えて交流し学び合う中で、何かを始めるキッカケをつかんだり、モヤモヤしていた想いがカタチになっていきますよ。チラシの他、ホームページやツイッターで告知します。

特に今年は…出会いがいっぱい！

市民活動者によるワークショップ、活動の様子を紹介するトークイベント、活動に関わる人たちが集う交流会など、まちづくりに関わる多様な市民が出会い、交わる機会がいっぱいです。ぜひ、のぞいてみてください。

仙台市から

仙台市の地域活動・市民活動に対する支援制度をホームページからご覧になれます

仙台市では地域活動や市民活動等を行っている方、団体等に対してさまざまな支援を行っており、これらの支援制度を一覧にしたものを4月から市ホームページに掲載しております。利用できる支援制度が、活動の分野から探せるようになっておりますので、皆様の活動にお役立てください。
URL：http://www.city.sendai.jp/kurashi/manabu/npo/shimin/shiensedo/shien.html
※平成29年4月1日現在の内容です。
※制度の内容や募集期間の詳細については、一覧に掲載されている各制度の問合せ先へご確認ください。

つながる つなげる サポセン

仙台市市民活動サポートセンターとは

様々な分野の市民活動、ボランティア活動の支援施設です。「自分たちのまちをもっと良くしたい」。そんな市民の自発的な活動を応援します。

ご相談ください

ボランティア活動をしたい／団体を立ち上げたい／組織運営の悩みを解決したい／他の団体や他のセクターと連携したい／自分のスキルを地域や社会に役立てたい…

今月の休館日 ：4月12日（水）・26日（水）

開館時間　月曜日～土曜日　9:00-22:00
　　日曜日・祝日　9:00-18:00
休館日　毎月第2・第4水曜日（祝日の場合は翌日木曜日）年末年始

〒980-0811　仙台市青葉区一番町四丁目1-3
TEL 022-212-3010　FAX 022-268-4042
地下鉄南北線「広瀬通駅」西5番出口すぐ／地下鉄東西線「青葉通一番町駅」北1番出口から徒歩6分
[HP]http://www.sapo-sen.jp　[Blog] http://blog.canpan.info/fukkou/　〔Twitter〕@sensapo

仙台市市民活動サポートセンターは、特定非営利活動法人せんだい・みやぎNPOセンターが仙台市の指定管理者として、管理運営を行っています。[指定管理期間2015年4年1日～2020年3月31日]

**市民ライターや学生記者が、
仙台の市民活動団体やワクワクビトを取材しています！**
▶市民ライター
https://kacco.kahoku.co.jp/author/writer
▶情報ボランティア@仙台
https://kacco.kahoku.co.jp/author/volunteer16

▶「ぱれっと」バックナンバーはホームページからダウンロードできます。
▶ぱれっとに関するご意見をお寄せください。

［ぱれっと 読者アンケート］サポセンホームページからアクセスいただくか、携帯電話等でQRコードを読み取ってご利用ください。

発行　仙台市市民活動サポートセンター
発行日　2017年4月1日
編集　特定非営利活動法人せんだい・みやぎNPOセンター
デザイン　PEACE Inc.
編集人　菊地 竜生　太田 貴　菅野 祥子　松村 翔子　黒川 夕紀
発行部数　3000部
配布場所　市内公共施設や行政窓口、市内一部店舗、市内外の支援施設

ぱれっと 4

仙台市市民活動サポートセンター通信 ぱれっと　2017 No.212

“ぱれっと”には、仙台市市民活動サポートセンター（サポセン）にいろいろな人が集まり、
それぞれの色（個性）が発揮され、新しい出会いや活動が生まれていく。そんな願いがこめられています。

今月のワクワクビト

伊達の舞
佐藤（さとう） 瑠美（るみ） さん（31）

すずめ舞う 全国に仙台の魅力を届ける

軽やかな笛や太鼓の音色に合わせて、扇子がクルクルと八の字を描く。泉区の佐藤瑠美さんは、杜の都を代表する伝統芸能「仙台すずめ踊り」の踊り手です。毎年5月の「仙台・青葉まつり」では、100以上の祭連（まづら）が練り歩き、街を彩ります。
初めてすずめ踊りに触れたのは、大学のサークル活動でした。友人に誘われ、運動部一筋だった佐藤さんは「楽器は苦手だけど、体を動かすことなら」と挑戦。卒業後も仕事と両立しながら続け、気づけば12年が経っていました。「仲間と一つのものを作り上げる一体感が魅力です」。2015年には、仙台すずめ踊りの魅力を広く伝えようと、踊り手とお囃子（はやし）が、祭連の垣根を越えて集う「伊達の舞」の一員に。法被に仙台の文字を背負い、全国各地で公演しています。
地元の人から激励を受けたり、各地の踊り手と交流したり、全国に広がった人の輪は何よりの財産。これからも、すずめ踊りを通じて、仙台に親しんでもらうきっかけをつくります。

取材・文　市民ライター　溝井貴久

特集

障がい者とデザイナーが力を合わせ、
“仙台らしさ”を商品化　SHIRO Lab.

伊達の舞

HP　http://www.aoba-matsuri.com/dmblog/　Mail　info@aoba-matsuri.com

2011年、「仙臺すずめ踊り連盟」に加盟する60団体余りの祭連から、メンバーを公募して結成した「すずめ踊り親善使節団」です。2012年から、ほぼ手弁当で日本全国・海外での公演を行い、仙台すずめ踊りの普及拡大と技術向上に励んでいます。約80名の団員が月1回、市内公共施設などで稽古し、切磋琢磨しています。今年の「仙台・青葉まつり」は、5月20日（土）と21日（日）に開催。祭連ごとに創意工夫を重ねた踊りを披露します。

特集

障がい者とデザイナーが力を合わせ、“仙台らしさ”を商品化　SHIRO Lab.

近年、企業で働く障がい者が増えています。一方で、会社で働くことが難しい障がい者のために、就労継続支援事業所があります。宮城県内の就労継続支援事業所の賃金（工賃）は、雇用契約のもと働くA型では月63,011円、雇用契約がないB型では月18,643円です（宮城県、平成27年度）。B型では、雑貨などの商品をつくり販売をしている事業所が多くあります。しかし、福祉商品としてしか、手にとってもらえないという課題があります。もっと多くの人に商品を手にとってもらい、障がい者の自立につなげようと、NPOと行政が行う事業を紹介します。

障がい者とデザイナーによる取り組みを仙台に根付かせたい

NPO法人
エイブル・アート・ジャパン東北事務局
武田和恵（たけだ かずえ）さん

×

地元デザイナーを育成したい

仙台市経済局
産業政策部産業振興課
創造産業係　係長
梅沢裕子（うめざわ ゆうこ）さん

×

障がい者の経済的自立を実現したい

仙台市健康福祉局
障害者支援課
地域生活支援係　主査
那須義彦（な すよしひこ）さん

障がい者のアートに商品としての価値を

2017年3月、仙台市八木山動物公園の新しいおみやげの販売が開始されました。手拭いやスケッチブック、Tシャツなどには、様々な動物のイラスト。ゾウの皮膚、動物の鳴き声などをモチーフにした、どれもユニークで目を引くものばかりです。

これらの商品アイディアは、2016年9月に八木山動物公園で開催された「48時間デザインマラソン」というワークショップで、障がい者と地元のデザイナーがチームとなり生み出しました。障がい者は、個人と福祉事業所に通う22人が参加し、デザイナーは、学生やフリーランス、地元企業から12人が参加しました。障がい者は、思い思いに絵を描き、デザイナーは世の中に求められる商品になるよう、アイディアを固めていきました。2日間で出たアイディアから、全部で16種類の商品が生まれました。

商品開発プロジェクトの名は、「SHIRO Lab.」。知的障害があったと言われている、商売の福の神、仙臺四郎にちなんで名づけました。目的は、仙台の新しいおみやげをつくることと、多くの人に障がい者のつくる商品に関心を持ってもらうこと。さらに、販売による利益を障がい者に還元することです。NPO法人エイブル・アート・ジャパンと仙台市の産業振興課、障害者支援課が協働して取組んでいます。

仙台での定着を目指して

エイブル・アート・ジャパンは、障がい者の芸術による可能性を広げようと1994年に東京で設立。障がい者が芸術作品を発表する場や、芸術に関わる機会をつくってきました。東北でも、東日本大震災以降、障がい者の文化芸術活動支援の一環として、宮城県内の障がい者とデザイナーをつなぎ、商品づくりを行ってきました。東北事務局武田和恵さんは、「仙台で活動を定着させるためには、地元デザイナーの参加が不可欠」と、話します。平成28年度仙台市市民協働事業提案制度を利用し、障がい者の自立支援に取組む障害者支援課と、地元デザイナーの支援を行う産業振興課との協働事業を提案。障害者支援課は、障がい者の収入アップにつながる事業に賛同。産業振興課は、デザイナー育成の場にもなると感じ、3者での協働事業が始まりました。

障害者支援課は福祉施設へ、産業振興課は企業やデザイナーへ参加を呼びかけました。障害者支援課の保健師は、エイブル・アート・ジャパンのスタッフと共に、障がい者の創作活動を見守りました。3者の強みを活かすことで、プロジェクトの裾野が大きく広がりました。

参加したデザイナーたちを見て「失敗を恐れず、自分の力を発揮できる場になった」と産業振興課の梅沢裕子さん。障害者支援課の那須義彦さんも「どういう商品が売れるかという視点を持つことの必要性を感じた」と課を越えた協力の成果を話します。「SHIRO Lab.」に参加した障がい者は、新たなチャレンジを「楽しかった」と振り返り、デザイナーは、「デザインを通し、障がい者と関わることができた」と、新しい発見を話します。福祉事業所の職員も、「多くの人が障がい者の特技に気付いてくれた」と、周囲の変化を喜びます。

■連絡先
● NPO 法人エイブル・アート・ジャパン東北事務局
〒983-0851 仙台市宮城野区榴ヶ岡5番地みやぎ NPO プラザ内 No.16
TEL 070-5328-4208　Mail soup@ableart.org　HP http://soup.ableart.org/
● 仙台市健康福祉局障害者支援課　TEL 022-214-8164　FAX 022-223-3573
● 仙台市経済局産業政策部産業振興課　TEL 022-214-8263　FAX 022-214-8321

自分らしさを仕事に

完成した商品は、福祉施設だけでなく、動物園のショップや県内外の大型商業施設などで販売され、今まで障がい者と関わりのなかった多くの人の目にも留まりました。商品を手にとることで、障がい者の新たな一面に気付くことができます。

武田さんは、「この取り組みが仙台に根付き、東北に広がっていってほしい」と期待を膨らませます。互いの可能性を知り、理解しあうことが、誰もが自分らしく働ける社会へとつながっていきます。　（取材・文　宮﨑　真央）

お役立ち本

63人の復興起業家たち　いま、始まっている東北の未来

発行者:公益社団法人日本サードセクター経営者協会（JACEVO）

3.11の後、ボランティアや復興工事関係者のために岩手県陸前高田市のお母ちゃんたちが作った竹駒食堂。始まりは、逗子からやって来た支援者の発案でした。甚大な被害を負った岩手・宮城・福島では、まちの復興を目指す「復興起業家」が多く誕生しています。担い手は、女性・若者・高齢の方、よそ者・被災者など多種多様。本書は復興起業家自身が「なぜ・どのように活動を始めたのか」生の声で語った記録です。

コトハジメ

広瀬川1万人プロジェクト 第23回広瀬川流域一斉清掃

日時:2017年4月22日（土）午前10時～午前12時
仙台のシンボルである広瀬川の環境を守り、多くの人に川に親しんでもらおうと、市民が春と秋に広瀬川流域の一斉清掃をしています。昨年秋は1845名が清掃に参加し、419袋のゴミを回収。4月は作並から閖上海岸までの広瀬川流域を予定しています。参加のお申込みはHP申込みフォームにて。
HP http://hirosegawa-sendai.org

ここチェック

障がいのある子ども達を、地域で見守って欲しい ～ハートバッチ～

障がいがあるように見えなくても、生活する上で困難を抱えている子どもたち。中には、地域で生活する訓練のため、一人で外出している子どもも多くいます。「周囲の人に理解し、温かく見守って欲しい」と、古川支援学校の保護者が、「ハートバッチ」を作り、普及活動を始めました。他の支援学校にも、活動の輪が広がっています。
問合せ先:宮城県立光明支援学校PTA
TEL 022-379-6555　FAX 022-379-6557

▲バッチの裏には、連絡先や名前を入れることができます。

「転妻」の暮らしを明るく照らす～SENDAI転妻カフェ実行委員会～

―市民ライター　斉藤　利直―

転勤族の夫を持つ妻、いわゆる「転妻（てんつま）」の暮らしをより良くしようと、2015年11月から転妻同士の交流の場「SENDAI転妻カフェ」を、仙台市の公共施設などで開催しています。

会社というコミュニティがある夫と違い、妻は新しい土地で、他人と接点を持つにも一苦労。町内会やPTAなど既存のコミュニティに入っていくのも容易ではありません。「カフェは、孤立しがちな転妻が気軽におしゃべりや情報交換ができる場所です」と、実行委員会の大澤美樹子さんは、目指すところを話します。

カフェに参加した坂上恵美子さんは、「一生、夫の転勤に振り回される人生を送るのかな」と悩んでいました。カフェでは、転妻たちが自分の体験談を語り合う企画があり、その中で、転勤先でヨガ教室を開いたり、英会話を教えたり、自由に生きる妻たちに出会いました。坂上さんは、「転妻でも好きな生き方ができると気付いた」と、今では実行委員として活躍しています。

▲転妻と地元妻の混合メンバーが活動継続の秘訣です。

17年2月には、海外赴任を控えたメンバーが中心となり、外国人の転妻に向けたイベントを市内で開催。その行動力に驚かされます。転妻たちの活躍が、孤独で悩み多き転勤族の生活を明るく照らしていくのかもしれません。

■連絡先
SENDAI転妻カフェ実行委員会
TEL　080-5571-6933（大澤）
Mail　sendaitentsuma@gmail.com